

911.3
シ

守中菴一考遺稿

阿心庵永機序
五梅庵泉溪跋

守中菴一芳遺稿



五十嵐氏藏版

定中養心齋

正襟端坐對
阿心誠不謝

定中養心齋

阿心誠不謝

正襟端坐對

阿心誠不謝

一



知つた事の如く其の如く
 あり又此所を以てし
 由りて其の如く其の如く
 切七日課の如く其の如く
 一よりして其の如く其の如く
 する事此の如く其の如く
 此の如く其の如く其の如く



世にたひつゝあはれむいぢたか
らむとてあはれむいぢたか
めくさくさくあはれむいぢたか

とてあはれむいぢたか
す

三
い
き

白雲を夏にけしむるを懐か

春混題

その東風ははつゆり匂ふ炭火哉
元日や樹々お奥あふみつの音
しゆをゆく芦の穂影や初日の出
日何たりを手にしめよ摘若菜哉
入れものゝ色をくたせぬ白魚哉
坂くらふそのまゝ立やゆきの蝶
餘所に居てくまゝ日多し松の内

艾隣の實筭に渡らせ給ふ

意利君をはり奉りて

うらもくき枝のあらひや松の花

あはれいづれに白木のつらさ
めくもくわきふけりて

こゝろあはれ

す

三十一

日清年夏に於て評定名を認む

春混題

その東風はほつり匂ふ炭火哉
元日や樹々も奥あふみつの音
しゆを物く芦の穂影や初日の出
日何たりを手にそしめよ摘若菜哉
入れものゝ色をくらたてぬ白魚哉
坂くらたそつらま立やゆさの蝶
餘所に居てくまゝ日多し松の内

艾隣の實筭に渡らせ給ふ

意利君をはた奉りて

うらむしき枝のあらひや松の花

簾目もくつさぬあそやのころ雪
鳥の毛あふきとまりたる土筆哉
春風やくれとむ水のゆとりの
雪そらに影れひらけんと哉

樂天先生の琴詩酒の三を

もて生涯に友とせりとそ

予は琴もなく詩もなければ

と酒には都て先生より勝

れ玄かもしらそ

花よ瓢をひとの殖すことあかき
譲られま座すも居つゆぬ花見哉
湖のらも揚しかを見るひはり哉

つみ糖のとも崩してわらつは死
行舟や花あふくの先きそり
をの影れらともくるり春の水
とりとめのあき挨拶やひるの客
山ゆきのよそゆらきとぬそら櫻
爐置つて家あたらあき思ひのな
巢の鳥よ起き勝朝もあゆりけり
花ゆとり曠着れまとのゆき哉
不老地まのそん青きを踏あそろ
ひとの日や野守か門も浮世めく

戴き後に松島は光景を持

たる也有か新亭を賀して

不足あき杖はのまんやうめの花
のちはやく梅は眼はゆる灯のち
ひと樹つとわわれを暮る柳のち
朝舟や掃除はうちよあきのたう
降しとを音あそありぬ春はあめ
枯芦のとひくたのき雪舞のち
見とあかぬあそろお睡し春は山

讀狹衣

笛の音よまはとれさうな臈のち

親あねも正月めむけけむりうか

仙府の彫榮か四七の春を

いはふと聞き予も齡のお

な一けれ

向何ふそのとむと添ん梅やあき

俎板の物を夜よ入るやはるの月

晝あそろの動けはうとく柳のち

轉りや日たけて起るあそあそろ

よ泥人せをあひ火桶や花のち

春のゆり其日くあかめかな

連翹やそ居よとくく花のち

北條邸の夏は庭もせに狐

雲ひせつわくらぬけさの柳わを
ゆく船まゆわひ多けり輪年繩
石をつた痕もぬかすは多の草
山吹やひと重はもろく保ちよき
折わくあたききやはあは拾ひ箸

寒 訪 隠 者 不 過

梅やあきとふ留主守れと別れ處
ひたくと月夜まちりく櫻わあ
牛飼も牛をとも寝やゆねわすむ

のなきけると八々まかつ
みも出なんさかなるかと
駭と主氏康死み夏はきつ
ねに音蟬のから衣巴々か
身の上なきよ どの一詠
にて何さゝいりを無かり
いとそ今柳齊か年のあ
た婢女に太箸を折られ
といへるはいとこゝろよ
からぬ事に似されとそ
はした女のいしたなき
さと思ひて必まも氣にす
る事なかれよと予か拙き
一句に不詳もとみに吉事
どかはることを祈り侍る

雲ひをのかわらぬ河さの柳わを
ゆゑ船よのわひあけより輪年繩
石をうた痕もぬわとほは多の草
山吹やひと重はもろと保ちよき
折わとらたききやはあれ拾ひ箸

寒 訪 隠 者 不 過

梅やあきよふ留主守れと別れ晷
ひたくと月夜よちりし櫻わあ
牛飼も牛をとも寝やのねわすむ

夏混題

植のけて皆に見せけり竹乃むき
道とん先汗ふくやまたのひと
ふりはれて間もなれ客や行々子
とり次乃出ぬ間ぞあらは扇かき
寐たひとを起すもせわしなる氷
敷砂の匂はゆをくるく新樹のあ
一日のはとり見ゆるやはな御堂
不愛道不愛貧
なゆくの月ゆけたの破蚊屋
帆乃影もふのとくらむや夏坐敷

見わたして夫つらむゆふ牡丹哉
もるく日の朝からゆはる若葉哉
着まそは青田に向きゆふねの人
さし出した灯の上越すや蠅一ら
見當たるまそを浮巢の見様かな
不意を知る裕のゆや華着さき
明やすき夜に似合いやけ一重
蓬生の四五けんゆく紙のゆり

月に花に楚をおなまうせ

し友とちの別れを送るは

いと各殘をう詠ること

本意ならぬとせばさま

いてたゞ其業の上達とな

ん他事ならいれるのみ

あ母たのく雲井をそしれ不如歸

う多を見る竹よ親し外山かな

さむしろやわりなく更す澁團扇

夏菊やはあをまふれよ黄昏る

柳齊か初孫をまうけまに

申おくる

撫し子れ末たのゆきまのはと哉

雨されの扇ひろひぬわむはや

松明あをえささしもゆる清水わか

草庵

芥子さのて俄もちのき浮世わか

うくのすや老て定めぬ鳴ととろ

磯の香のそはぬ日はあゝあら衣

菜はらのそいちよのてけり蝸牛

彼は黒是を白と見つか避

暑の衣にすら其色を争ひ

好と實に昇平の恩波に浴

するめてたき民にそ有け

る

かたひらや暮のころひと暮る人

本意なうめとそはさまか

いてたゞ其業の上達とな

ん他事なういれるのみ

あぢたゆく雲井をそしれ不如歸

うゑを見る竹は親し外山かな

さむしろやわりなく更す澁團扇

夏菊やはちをまふれよ黄昏る

柳齊か初孫をまうけまに

申かくる

撫し子れ末たのもしさつはま哉

雨されの扇ひろひぬわのはや

松明のをえさしもゆる清水かな

草庵

芥子さのて俄もちのき浮世かな

うくのすや老て定めぬ鳴とこ

磯の香のをはぬ日はあゝあら衣

菜はつゆそつちよのてけり蝸牛

彼は黒是を白と見つか避

暑の衣にすら其色を争ひ

好と實に昇平の恩波に浴

するめてたき民にそ有け

る

わたひらや暮のころひと暮る人

下やその夜もけもあるや幣一の
夏の夜のふけて人なき行燈の
朝かけやふねのふとく薄羽織
近みちの葎ふと來てのをま〜

悼雅遊

ある上の闇もやと添ふさつれ哉
啼さうあまはすは鳴かて行々子
箏やのけにちのくるあわのうち
茶草庵
と〜らまて時めくつたの若葉哉
往さきんまそるやうなり雲の峯

はれ際の山かゝ見えて茨かをる

霖雨にうみはて一日に酔

倒の外佗なし

顔よりく蠅もとも寐や小は九日
ぬきかゝる羽織やひるの竹婦人
虫はあのをひ夜ふのく残りけり
夕やけのあつよ若葉のひわり哉
文字ありに雨夜を這ふや碑の螢
はく舟の數よまのちら新茶かあ

秋 混 題

寐よくさの夜は早や過て渡る厂
網ほまた家あまも見ゆて芦の花
ふま場わら村の名をきく燈籠哉
稻つまや網曳寄する手のゆると
わた町や木槿あつなく荷附うま
ひき沙よなひひたまくの薄わを
あさ寒や雫あつらよたけのゆれ
鳴たつやのつたつあつて歸る人
沙の來しやうまも見えて艸の花
朝はれあつあつ見ゆて尾花哉

あきりある秋よもせまる暑さ哉
降わとも客を見しゆや遠はな火
落る日に眼のまとなりぬ花野哉
節ひとつあけて太るやたけの露
ゆつとあく戸よ寄り添ぬ秋の暮

道を學ぶの半はにも至ら
すして止み捨るは凡俗の
常といひなから實に淺
間しき事ならずや

折角とさくくきくさうを秋あまも
さましくよ夕日の残る紅葉あま
水飲みうらくつれするをとり哉

秋 混 題

寐よくさの夜は早や過て渡る厂
網はまた家あまも見ぬて芦の花
あま場あら村の名をきく燈籠哉
稻つまや綱曳寄する手のゆると
わた町や木槿あつちく荷附うま
ひき沙よまひわたまの薄わか
あさ寒や雫あつちくたけのゆれ
鳴たつやのつたつあつて歸る人
沙の來しやうきも見えそ艸の花
朝はねあまのうき見ぬそ尾花哉

かきりある秋よもせまら暑さ哉
降わとも客を見しゆや遠はな火
落る日に眼のまとまりぬ花野哉
節ひとらあけて太るやたけぬ露
ゆつとあま戸よ寄り添ぬ秋の暮

道を學ぶの半はにも至ら
すして止み捨るは凡俗の
常といひなから實に淺
間しき事ならずや

折角とさくくまきくを秋あま
さましくよ夕日の残る紅葉あま
水飲もうらうつれするをとり哉

添わけもあくと日暮る案山子哉
七夕や竹枝何らあをまくらゆと
稻つまや羽をくみまな樹は鳥
雨かせ此日をようらゝや鶏冠花
一田つゝ月すみゆえて落しみの
三畝ほどなみあとのわゆる野分哉
くれうけを鶏頭赤し小ぬう何め
江ひとつとを繋記あひけり鴈と影
啄木鳥やあす此日和もさうふ音
立まゝは蝶をを知らぬ黄菊はた

艸庵

寐のゆも露ふる秋を壁はくそ
秋の蚊はたゞとまると屏風哉
三日月はあゆめも久しあま世帯
稻つまや是ほと近記帆を知らぬ
物わけの闇たゞひあし今日の月
黄昏るゝゆとりも見せを女郎花

紅於二月花

風ものろあふゆとあもふ紅葉哉

窓外時間一葉落

あしゆも秋たつあつとや夜の庭

渺々秋風生白波

かゝはれて影も見せぬ湖の月
虹の根もつゝ見も留ぬ紅葉の多
客待や盆の木乃實もよきつゝ
笹は下の夜を賑えしとぞわれ椎
あさゆゆや出舟ほのめく浦の風
あゝ軽泥身すきこのゆゝ芋売賣
小人罪なく玉を抱いて罪
ありどかや
籠ぬける心わり多しとぞくし
驚ねむもまうけの舟やあめの月
門の露米つゝとぞのあめりゆな

切籠賣風は多やゆあゆゆけり
鞍わたゆゆ多し飛あり獵ゆせり
泥深う足あゆゆはとゆゆけあま

冬混題

遠はたや多とれー後の薄けあり
とき捨たまゝよ草鞋の氷りけり
寒きとや咲ゆゆひーとたつ日數
出初のもはひよは似ぬ雪見かま

翁 忌

あゆむ道の道は果あき枯野あ
むく牡蠣の売を物もーや飽くら
うらやまー野守あとの小六月
かへるさは徳利も捨て鉢たき
めさりめく洗ひ蕪やの目のたな

仟今か旅装をかくりて

なめくーよ遠眼のきくや霞の
止ま際のおことーわらぬ霞の
今つた水主を上坐やえひす講
藪へた隣の見はく今朝のゆき

月しろよむく様子ありあゝ千鳥
節季候も一足退くやのきあつく
さつはりと暮て雨降る小春のあ
さりけあう風をさまりぬ冬木立
雪車唄のひととりつゝや向ひ風

なかくくに九折なるの

御製もさるとなから

江越にゆゆれさうある落葉哉
ある中のあるけいさあり雪の塔
別々よおしとりゆとるあふれ哉
山茶花や絶てひさし蝶ひとの

翁 忌

あゆむ道の道は果あき枯野わあ
むく牡蠣の売をおもしや飽くら
うらやまー野守わととの小六月
かんなさは徳利も捨て鉢たつき
ゆさりめく洗ひ蕪やの母のたな
仟今か旅装をかくりて

なゆくよ遠眼のきくや霞のあ
止ま際のまことしわらぬ霞のあ
今つのだ水主を上坐やえひす講
藪へたら隣の見ゆを今朝のゆき

木わらしの雲のけ運ふあり戸哉
手送りもたらし火のきぬ里神樂
冬わねやりの代のわらしの祠

千榮隆村か有室の賀に

末あわきかぞりや冬はうめ二輪
さり氣なく人やり通す丘見わあ

竹叟百壽

此きみの猶わわやくや霜くく
あわくもちり際久くわたり花

鏡月秋塚系



明和第五 戊子 桂秋 月夜塚集 桃如房亭一

順ノ連 喰アリ 茲ニ零ス

也室禪師ハ伊賀上野 産祖翁ノ從甥也



傍ニ池アリ

大光寺十四世 碓花也室建馬

名月ヤ作哉 芭蕉翁
めくりて扱長きう



梅林

朱山

習文

栞三

五三



ろつ女

仙栞

明和第五 戊子桂秋 月夜塚集 順ノ連陰アリ 茲ニ零メ
 也寒禪師ハ伊賀上野 産 祖翁ノ徒甥也

慶應三丁卯
 小春念五
 於大光精
 舍月夜
 塚俳諧
 興行無微
 各列席

塚まらめそうれそ月の影

也寒禪師



齋
 谷匠
 興行
 兼持齋
 舎目齋
 須大光齋
 小春念正
 齋三下眼



見さうちに物忘れする身
 を常に此燕翁の事は目す
 れ兼て

塚ままのまらめせうれ五月の影

脇起

こころまろく遠かりの聲
 百一やうの軒端つたひに蔓りて
 脇目もふらぬ笠をつとくる
 子供等の治聲酒吞をとのりわり
 地虫もあるをもう出るところ
 摘河とのらんつと發起る五架垣

也東禪師

便我
 江三
 鯉洲
 英祐
 九から
 桃二

はなた繻絆の模様さくやく
 見ぬ振をする程人けとられて
 たましくさせそ初ゆき大小
 更るまてあつさのさめぬ市乃月
 めつさうに直乃たむい鉢植
 着ゆさるも醫者は流石に家業柄
 降とゆつゆの雪はちらく
 爛鍋はたまご三ツ四ツ割こんと
 いつものくせもうたふ小謠
 とんまりと池まうのらふ庭乃華
 蝶もふたふあをふ碑乃前

女
 かつら
 一 掌
 仙 柳
 無 徹
 松 林
 習 文
 梅 林
 朱 山
 柳 三
 一 兮
 はや

右一順

慶應三丁卯小春於大光精舍

雲に手をあてるあゆみや稲乃花
 いわけあや火桶は温む本乃そり
 木の葉火を圍ふて立やはたの人
 冬されやてらそ佛の留主らしき
 景色にも無てもあらぬ案山子哉
 初秋やあらひあけたるそらの色
 はつゆきやは花ゆちもうめ椿
 照こまぬくまゆつら今年綿

京
 有 節
 黙 池
 淡 節
 公 成
 芹 舍
 大 晃 坂
 素 屋
 湖 水

月花あゆかりはせしと岡見あ
 不沙汰しそきよろりと來相模取
 めかきほま着てさへ風の浸身哉
 捨られて身はうかむ瀬や爪は馬
 家路やは渡あもありて初しくれ
 駕鴛やとひと云ふ間も波はあや
 むとりまは二人とありし岡見哉
 捨抗のちの洲にありそふゆの川
 持て來て河豚をも云そは肴うり
 帆はしらの空に入けり夕しこれ
 さひ聲のところをまりの里神樂

江 爲 戸 山
 等 栽
 氷 壺
 芳 草
 大 虫
 思 樂
 み 雄
 見 外
 越 春 湖
 山 曾 後 吉
 金 形 英

子の折るを母の見て居る花野哉
 池に星うつりそあきのさむを哉
 落着て水のあかるくあも夜かな
 牽牛花の凋むさまもし小ぬる雨
 地の色も見せほかさある落葉哉
 すむ空乃水もゆれ込む尾花かな
 宇ら枯や物ゆあなひも風のおく
 涼かせも二百十日はあましゆあ
 更たれば近く見え透くつきの鹿
 庫裏のみそこと足る寺やつり黄
 夜も月の初もみに居る尾花かな

福 其 一
 西 島 美
 其 席
 女 竹 守
 み や
 竹 雅
 雨 松
 三 幸
 万 里
 白 桑 五
 千 石 薦

森乃夜は音なくあけてねむる山
 入る月のほふれ兼けり雪のやま
 相撲場の人のくつれや夕一くれ
 庵に灯ももぢれ兼けんゆりの鹿
 ひくらしや小雨あつれて聲の張
 川幅や野分のおとをの得るのき
 星ひとつり流まゝのむさむさむな
 花咲をききくも似ぬ枯野をか
 枯篠に見添へてくるく蜻蛉をか
 ゆるされて頭巾の上此のとま哉
 築ものゝ魚れひの星や初あら

壺 魯 山 鈞 柳 清 梅 圭 江 雲 松
 中 關 遊 月 泉 霞 甫 柳 香 居
大河原

翁息やわけて氣のつく水のおを
 冴る夜の浪おとちかき寒さのな
 かりを着る袷小袖や阿さのあめ
 をしけ多く槽火馳走の山家をか
 ふゆと眼のはしるや冬のあそ椿
 朝寒やをらかへをすする琴のゆと
 初あきや船と陸をたたらちゆたり
 峯の雪はれてふゆと暮よけり
 冬されや湖水よひたる空あさむ
 翁息やすそり直せそあはさむれ
 一ツ家乃見わけて遠き槽火のあ

有 無 淵 馬 然 宴 栽 風 海 齊 夫 居
増 田 椎 挑 天 一 經 岩
植 松 松 靖 一 よ 田 椎 挑 天 一 經 岩
四

照曇るをらよ風なきすく死かな
 活業をのそかぬさそや雪けしき
 名月あひつそりしたり別ざし
 吹ぬけそりんと暮けり花すそき
 氷られを氣のゆく石のくゆき哉
 二度降てよあれゆくすや雪達摩
 秋ゆけふ雲よちゆきあそねかな
 稻妻の拍子よわたるあそしゆあ
 鹿あそやうしゆを見れと晝乃月
 塚の前とああつまりを夜寒かき
 鬼灯や土産のうちれはあれもの

仙松 一府 止 嵐
 彫 榮
 太 山
 花 心
 花 哉
 入間田 杉 芽
 松 華
 春 岱
 少 年
 丸 一 本

生垣のきよき日さしやあきの水
 曳てからちかられあまる大根哉
 落葉して見通しに呼をありゆな
 むく起やゆきゆきゆき紅葉山
 船出して足痕ことやうきとあり
 朝寒やとひたるまとの釜ひをら
 稻妻よわゆ不行義を見られけり
 あゆと来る風ゆきとるく野中哉
 只おけは鳥ゆをまるやなる子蠅
 抱た子に指してをしゆる紅葉哉
 煤はきやふところすそゆのしう鼠

七や一
 技 支
 桃 園
 志 遊
 壽 扇
 一 掌
 九 掌
 習 三
 女 三
 館 山 柳
 栗 峯

ねむる迄ひさも崩さばはら炬燵
 遠かけやこもりをばしる鐘乃聲
 ふき上てゆふ日よひのる落葉哉
 夜のふけを物との淋しや起り炭
 爐ひらねは過てふたりの炬燵哉
 物洗ふゆとの多ゆれや三日の月
 平生も物をふ山家やあきのくれ
 あれこれとまゆふ枝なま萩の花
 餌あぢらぬ干菜ゆかふ雀ゆか
 眼よ力ゆれをささむや唐ゆら
 よく見れり醜れめゆな蕎麥花

角 松田 若水 林
 二 扇 可 扇 水
 一 仙 三 可 扇 水
 文 好 齋 三 可 扇 水
 松 青 好 齋 三 可 扇 水
 東 可 雨 松 文 好 齋 三 可 扇 水
 中 名 朱 改 雨 松 文 好 齋 三 可 扇 水
 龜 生 朱 改 雨 松 文 好 齋 三 可 扇 水

名月や世界にち度もあけわたり
 あけ渡るあさ日と海の小春ゆか
 肌寒し夜はゆらりと井の煙り
 くるくや烏乃居すくむ小松原
 とたひれた様に更けり虫乃とを
 艸はらののち里は遠しむち乃聲
 大名の寐間もも鳴やきりく
 月もよくのつも眞向やあぢろ守
 寒い夜は奇麗ものころとを忘哉
 籬かけの面もあらずのときくれ

如 水 柳 齋 東 齋 三 志 東 齋 梅 林 保 義 新 芽 眉 仙

不自由な道をもゆるくと萩野の
 晴きりて峯のくもりや鹿のこゑ
 ゆく秋と積てたらしむ岸のふね
 ふゆのれの中はたしけり傍爾抗
 一ろ壁のほろけをくもる雲かな
 大勢てふ糸引あけし小はるの
 流れ來るとさよも虫のたの音哉
 日向かゝ覺えるけふの寒さの
 かゝは手あふのとくひけり稻爵
 遠よりあけ聲たのきあられ哉

無 徹
 同 英 祐
 同 習 文
 同 柳 三
 同 桃 二
 同 木

社盟の人々と、もに
 祖翁の碑を再奠し猶也案
 禪師の墓前に捨香合爪
 て隨喜の袂と絞る

まはゆさやまぐれ後れ月夜塚

江 三

我碓花翁此塚を築かきし
 より百歳の忌に及ひぬれ
 は心はかりの俳徒をまら
 け人々ど、もに香華をさ
 け待りて

折もくく山茶花ひらく日和の

便 我

便我僧ど、もに月夜塚と

俳諧真蹟集

灑掃一 祖翁の遠忌と吊
らひ奉りて

よき事の仕果へやすき小春をあ

塚上に二株の櫻あまこは

也 冥禪師尊吟をおさめら

れまなりと云傳へ待れば

おなしく回向す

はら冬や咲めぬさくもりの香まを

狀書真贋集

襄東去文慈子著古今學法

二孫鋒已派布于世今也慈風

能士日新月盛豈漏乎此筆

逆古亦不豈矣干茲東皇四保

山之果人一兮仟兮兩士次是

集之後而搜索林芝不手棲之位

翁或強約風能之逆童自

玉之修咏入木之毫病之鏡之
梓之備好之之新其志不
亦宜哉故余不堪感慨妄此
秀華題以言於卷首云
安政四丁巳載五秋

憚年餘隱居江三識



於可孝也
於可孝也
於可孝也
於可孝也

有之至



秋去也 岸子

か 人 人

相 森



居 方 福 丹

文 人

弟 方 案 書 此

千 多 年

掛 多 車 一 也

雲 乃 主 晴 多 日

善 十 七 九 九

那 榮

善 乃 中 亦 亦 云

か 高 也 乃 馬

一 申

世
如
物
母
友
業
後

聖乃啟

按

耳
多
又

美
由
味
成

明
何玉

古
今

月
外

主
法
知
里
と

新
日
書

新
橋
の
水

立
字

之也

也

墨居

日之

未

如

之

自省

涼しき夜

涼しき夜

如麻

舟中

金に葉を付る

降るるまきの雪

野案

山川壯麗如畫

戴之同公

龍英啟

曾人

日長產小

系之明道

積了系

美珍

津心くまを
きりけり
毎の水
一覽

一七
けり
水
一覽

老
松
葉
の
角

湖
産

松
葉
の
子

子
の
子

子
の
子

柳
子

早

以子考志去那

有祭初和魚

畫

菜

梅

物江

兒羨地茂波素迷傳

志遠子時雨多梨

白知

風也
居羊

瀟
池

手
一
雲
品

眠
龍

可
如
好
女

子
如
子

野
馬
其
里
一
子
の

手
如
子

素
紙

申子年

松居

正

子

正子

日

正

正

正

居るくまに間の

ある能達なる

東有

傳のあゝ

大無

おちか
香花

三楯

圓て米

白米

播式

三季の

類の之様

如佛

るるるるるる

二度も本の

行るるる

系中切穂子

きく年時

際

眉仙

三志

見おろし山七

静也衣更

川野川名満ち

高き

石の城

素鯨

凡乃漏るる戸口

之を於此等

如川

おのりかてり

徳久お彦

相一 を東

新芽

り 坂石 を交 く

まき の り

茶堂

春の終

梅のあと

あけのぼりや春を

はるのぼりや春を

あけのぼりや春を

柳

美母之志望見之
長勢終一理物

松物

夜之志望見之

少時也亦六月

少時

秋の葉の如く

〜~~~~

好まざるにこそ人陸路

静き心根の如く

入はる

月清の如く

故きもの如く

一日見ぬ木の鳥つ井草く
秋 若く風
所 一筆流りて心と心ぬや
雪乃系

任八子



春休生理

花と樹とわさかた
雪乃系
心と心と心と心と
心と心と心と心と

古里のうはさよもとの紅葉わさ
 ふく度よ落る松葉のふくれのな
 月澄は音もすみれり小夜にゆた
 二度を來ぬさまよ飛行千鳥かな
 月影もくさの葉のうく霜夜かな
 秋雨や晴て間もあく日のくれる
 舟へのりの霜こゆけり朝すくそ
 飛たちら跡をまたひく鳴子のを
 草のちや野やまよ見ぬ華の數
 うら表あく日のあたる野梅かな

附録

古里のうはさよもとの紅葉わさ
 ふく度よ落る松葉のふくれのな
 月澄は音もすみれり小夜にゆた
 二度を來ぬさまよ飛行千鳥かな
 月影もくさの葉のうく霜夜かな
 秋雨や晴て間もあく日のくれる
 舟へのりの霜こゆけり朝すくそ
 飛たちら跡をまたひく鳴子のを
 草のちや野やまよ見ぬ華の數
 うら表あく日のあたる野梅かな

笑止 北峯 玉水 桂住 而明 梅志 東海 松風 習靜 里二



隠れ家は身ほりのわされて雪れ道
 起ふすも氣らくもなきて梅の花
 ぞみたれや果よくら窓のたけ
 居ねむりも覺ぬ鳴子の風あたり
 傘を手もとりにて窺ふもくればな
 寒菊やのとも見送るゆきのそと
 蜘蛛の巣を艸をわけとり今朝の露
 朝よりも夕もたのむさや多きかな
 秋の蟬あめめら聲のはそりけり
 掃除した庭やふはりとときり一葉
 撫子やそのくも塵はまたゆもてる

理 周
 鬼 一
 雲 樵
 月 子
 静 知
 知 六
 北 川
 八 木
 明 遊
 如 心
 松 泉

雲よ持つ雨を待問はあつさかな
 兎角して人の撫ゆくやあはれかな
 歸り花咲そちらるわを何やしまる
 ちらくくと星の影ぞす井戸開き
 山越しよ何さうひさしけり稻の花
 裕きそゆきある山あむめめけり
 月ゆきの外は願もはほまのゆと
 爐開けし膏のしちりやあめの音
 秋たつやたつ處わをるみつら音
 やく晴る雪のあまりやまきつき咲
 枯あめら日も向多ほる尾花かな

里 笑
 其 涼
 有 儀
 坂 要
 春 岱
 風 月
 明 遊
 分 字
 閑 水
 桑 五
 金 英

の影のそなたは秋に立日か
 蟹の子も秋一りのちやははれの聲
 はら空や残る星さくらあたらし
 余處も居て聞は我家乃きゆ哉
 菊乃香も添あて貰はけむをのち
 趣のありけよ多らあかははれか
 起あゆる今くき影さの野分わか
 夕うけて来て折の上一花まつき
 聞いた處ははれも物け今不如歸
 澤ありも物よく影ある雲雀のち
 桃はたやむく起多のらひと巡り

梅 沖 其 良 珍 幸 雄 樵 有 梅 赤
 幹 龍 羊 々 齊 泉 節 暇 節 通 甫

元日や遊ぶところもまたりか
 着て居るをわめて忘るゝ頭巾哉
 人中へちまきれ込みけりあきの蝶
 万才の乗りあひもあき渡しのな
 鶯よけすやみつ屋乃あさともを
 羽子それて三つ四つうけを霞哉
 余花ほとひの往來となりぬ片在所
 兎角して名残の遠はあつさのな
 ささ波や明易き夜のおとを見る
 木かけ多き蟹の住居や三日れ月
 明やすく外山に引や夜のところを

芹 公 林 松 素 林 由 西 栗 祇 見
 舎 成 左 隣 屋 曹 誓 馬 香 脚 外

花すきて火桶あひしきゆふん哉
 見ると多々あさく向ふ柳のな
 田の風は消すほとあてる燈籠哉
 涼さふ下りるもせし味かな
 山吹やをれわくら葉も花のいろ
 添ふて居る川水遠くすつき夜
 三日月の戸口にせまる何ら一哉
 江のうらよ一雲もちて秋のくれ
 名月や雲よとくかぬひとあら
 わたり火の外も物多しと神樂
 初雪のをとまはらはぬ見廻かな

等 抱 卓 爲 逸 而 李 塞 蓮 五 悠
 裁 儀 郎 山 淵 後 曠 馬 宇 鈴 女

める程ふむや端午のあやめ艸
 五尺とも木のもとさらぬ一葉哉
 今かけた簀のけけよりあきの聲
 散ると多々あはる花は梢かな
 いぬりむも不斷あつらや老の癖
 里は灯は見えそあつまる蛙かな
 花七日つゆるつくとけのはあり哉
 雪の山皆日おゆてよありよけり
 名月の一夜ああきそつちよけり
 二羽立し鴨の行衛やよしゆふ
 透間ゆる風ゆりたふよあゆ牡丹

柳 壺 兼 山 鶯 眠 乙 良 御 風 珠 山 未 足 白 亥 み 子 立 子 透 ぬ

花ほとと人のせつめ雪見のを
 清義
 落々てあすえまきりの一葉のを
 大費
 土屋根の草をまわれてのちの月
 片雲
 客まをよ日のまほのあり梅の花
 詠柳
 菊の香もむけをすへけり朝の膳
 彫榮
 鶏もかねをきこえぬしつのかを
 五雲
 朝のや花はきれのよ咲ました
 一吟女五才
 よし
 さくせのふ言葉もまある鶏冠花
 江三
 更々やと月のまことを眺めけり
 仟兮
 元日や樹々に初とあるみつの音
 一兮

有 松 文 彫 一 榮 梅 河 立 星 自

臺 華 人 榮 叟 枝 仙 玉 兮 居 省

仙一號樂只館
 仙一號領入間田
 仙一號至誠堂
 同處萬代堂
 同處掃雪庵
 同處松壽亭
 同處彩霞菴
 同處八朔庵
 同處八朔庵
 大號一派亭
 仙一號今在仙臺
 同處十日庵

役

鹽 森 氏
 大 正 院
 多 由 氏
 高 橋 屋 榮 助
 小 玉 屋 覺 兵 衛
 日 野 屋 六 郎 兵 衛
 佐 藤 屋 佐 兵 衛
 佐 藤 半 兵 衛
 武 田 理 吉

白柳	智幽	雨柳	湖產	江二	一曉	美琴	魯人	野窠	如扇
知江	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處
奧州 若柳 町舍	奧州 梅庭 舍	鷺林 又本 蝶休 舍	同處 五瓢 庵	同處 水洞	同處 松集 庵	同處 鈍々 舍	同處	同處	同處 柳風 舍

稻垣	遠藤	相澤	富澤	伊澤	阿部	一夢	只野	靜月	永野
彦左	直助	屋太	屋幸	屋喜	屋甚	夢	野丈	月	野大
衛門	助	右衛門	治郎	之助	甚藏	葦	輔	庵	輔

三眉	如佛	白水	三楫	東有	蘆淵	松居	素船	眠龍	居羊
同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處
同處	陸奧 號 易木 庵	同處 雙松 庵	同處 孔風 舍	同處	羽州 上 山 產	奧州 對岳 樓	陸奧 白岩	同處	奧州 志津 川 亭

佐藤	無量	入間	日下	大泉	繁昌	齋藤	渡邊	庄子	雲思	千葉
氏	院	氏	氏	氏	院	善藏	玄順	嘉右	亭	屋羊
		田						衛門		治郎

附錄

六

素	如	新	蘭	壽	柳	柏	舍	江	仟	一
蝶	川	芽	堂	喜	齋	淵	用	三	兮	兮
同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處	同處
守	守	琴	松	松	殖	柏	柏	大	與	與
林	聲	壽	善	壽	善	園	園	河	舟	舟
庵	舍	庵	舍	庵	舍			原	庵	庵
								又	又	又
								一	蕉	梅
								日	字	垣
								庵		
菜	千	岩	猪	飯	清	村	五	村	村	入
花	葉	間	股	淵	水	上	梅	井	上	間
坊	隆	亭	柰	惣	琢	道	庵	氏	亮	田
	庵		之	吉	之	矣	庵	氏	之	綾
			亟		輔				亮	之

樂三韻

能考先師所以傳往古通遠也克祀於道

物我之法而安之始矣予視蕉門之書皆

定之貌而成味以平然且飽也倍從捷徑

之迷悟之元也近世所謂好句之吉志美

活路之生志美實故不足使語之意益

編法奪唐清之屬能道之矣莫大乎元祿之

素蝶	如川	新芽	蘭堂	壽喜	柳齋	柏淵	舍用	江三	仟兮	一兮
同處守椽庵	同處守椽庵	同處琴聲舍	同處松壽庵	同處殖善舍	同處柏園	仙臺	陸與大河原	陸與華庵又蕉宇	陸與舟岡	陸與舟岡
菜花坊	千葉隆庵	岩間亭	猪股奎之亟	飯淵惣吉	清水琢之輔	五梅庵	村上道矣	村上道矣	村上道矣	入間田綾之亮

樂三韻

佛考先師所以傳法古通遠也克記於道
 物秋之法而安之始矣予視蕉門之書皆
 定之貌而成以乎然且能也倍法捷徑
 而迷法之元也近世所謂好白之書其美
 活路之生之意其實故不足使語之意者
 編法奪清之屬佛道之矣莫大乎元祿之

能風多矣東方多矣
世之能說者多矣
身文較日闌十哲之流
泝流換骨源深奪絕
吟多幼而酷嗜俳諧
捐和藥數易事編歎
絕茅生句或勾棘

語連方之句深分競
校事後既以迄字湘
二生將待家真蹟及
叙新蘇梓是編也來
補而思之其於家之
語曰若欲方信易曉
詩不如和歌永願

石の今倍新得能社之昔昔能常得二生
之苦難深し木厚ん終く自年人平

安政丁巳晚岷

陸奥

樂只館有臺



一兮 虞書



故守中庵一兮子はみちれなく阿武隈の里にほと近き
柴田北郡船岡北藩士にして通稱を入間田綾之亮をい
ふ若年のころより俳諧をたしむ芭蕉翁乃跡を慕ひ二
木の松の春北曙子捨川北螢憚の關の花紅葉忘れす山
の雪の夕暮あらゆる名所をさくり風雅を友としはた
俳諧新古北書籍を愛し公務の外は朝暮好める道よ志
どかたむけ我師舎用の庵へも親しく往かへしけるよ
明治戊辰の年いとかりそめ乃いたつきより終に不歸
北途に旅立せしは其とし六月十三日にそありける干
時齡三十八とそ嗚呼命數のこと凡俗の知る處にあ
らさむとも未初老にも至らむして泉下北客となる事

れいみても尙あまりあり今年慈明忌に當りて孫伴月
子祖父の生前言のこせる句及俳諧を一集となし無魂
と慰さめ次て世にありし折親しかりし俳友へも送ら
まつとそのことよきを愚老にものせよと乞ふをを
いなまんもさそかなれば老のくり言をしもあるして
跋とそあしとへりぬ

七十三叟

明治廿七甲午夏 五梅庵泉溪

明治廿七年九月一日印刷
明治廿七年九月七日發行

編輯兼
發行者
宮城縣平民
五十嵐三省

宮城縣仙臺市元寺小路
十四番地

印刷者
宮城縣平民
菱伊新三郎

全縣仙臺市大町三丁目
十三番地

印刷所
菱伊活版所
全縣全市全雷地

20

明治廿一年三月廿一日
明治廿一年三月廿一日
明治廿一年三月廿一日



宮城縣平賀

五十三嵐三書

宮城縣平賀

五十三嵐三書

明治廿一年三月廿一日

